

近世日本哲学史

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

麻生義輝

近世日本哲学史

幕末から明治維新の啓蒙思想

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

近世
日本
哲学史
目次

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

総説……………11

第一編 序 論

第一章 西洋哲学渡来前史……………22

第二章 新大学（蕃書調所）の設立……………27

第三章 学徒の海外渡航……………32

第二編 幕末に於ける哲学研究

第一章 文久二年（一八六二年）の哲学講義……………40

第二章 オランダ哲学の東漸……………50

第三章 慶応年間に於ける哲学……………66

一 江戸の諸学者の活動……………66

二 京都に於ける哲学研究……………92

三 諸外国との接触……………110

第三編 明治維新直後の哲学研究

第一章 啓蒙思想の展開	118
-------------	-----

- 一 維新思想と復古思想 118
- 二 四民平等思想の発生 129
- 三 英仏哲学の隆行 138

第二章 研究機関の整備拡張	157
---------------	-----

- 一 諸学校の建設 157
- 二 旧大学（昌平黌）の復活と閉鎖 170
- 三 新大学（開成所）の復興と発展 179

第三章 哲学諸分野の研究	188
--------------	-----

- 一 明治四年の哲学草案 188
- 二 御談話会の哲学史的意義 202
- 三 社会哲学研究の萌芽 209

第四編 啓蒙哲学の構成

第一章 学会の組織	224
-----------	-----

第二章

哲学研究の諸成果……

243

一 論理学の研究 243

二 論理学の実際的应用 252

三 心理学書の刊行（明治八年） 257

四 政治哲学の全盛 263

第五編 啓蒙学派の分化

第一章

啓蒙哲学の内部的革進……

276

一 民権派哲学の擡頭 276

二 修身学の構成 282

第二章

新哲学派の登場……

291

一 大学の進化論哲学 291

二 西南の役と哲学思想の転換 306

後記 312

近
世
日
本
哲
学
史

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

凡例

一、本書は、麻生義輝著『近世日本哲学史』、昭和十七年七月二十日発行、近藤書店刊、の全文を収め、旧漢字を新漢字に、旧仮名遣いを新仮名遣いに改めたものである。但し引用文の仮名遣いは原典のままとし、地の文中における語句で引用語句とみなされるべきもの（引用符のない場合も含む）の場合も原典のままの仮名遣いとした。

一、副題として書名に添えた「幕末から明治維新の啓蒙思想」は、内容紹介として本書発行所が補ったものである。

一、読み仮名ルビは適宜補った。但し引用文への読み仮名ルビ補足はしていない。

一、著者地の文においては、「々」以外の踊り字（繰り返し記号）は不使用とし、また、「廿」「卅」は旧漢字ではないが例外的に表記を現代化して「二十」「三十」に置き換えた。

一、行内の二行割注のうち、（＊）のように※から始まるものは本書発行所が便宜的に補った註釈である。

一、著者地の文において、現今漢字表記されることが少ないものや今風の感覚では送り仮名が余分で違和感あるものは終止形のみを例示し、送り仮名は代表的一例のみを例示した。）

宛かも↓あたかも、迹↓あと、雖も↓いえども、奈何↓いかん、聊か↓いささか、孰れ↓いずれ、苟も↓いやしくも、愈々↓いよいよ、所謂↓いわゆる、況んや↓いわんや、印度↓インド、斯る↓かかる、斯く↓かく、嘗て↓曾て↓かつて、甲比丹↓カピタン、吉利支丹↓キリシタン、爰処↓爰・茲・此処↓ここ、悉く↓ことごとく、此・之↓これ、この、曩↓さき、偕て↓扱て↓さて、宛ら↓さながら、更ら↓さら、而し・然し・併し↓しかし、而る・然る↓しかる、屢々↓しばしば、姑く↓しばらく、頗る↓すこぶる、乃ち↓すなわち、其処↓そこ、其↓その、それ、抑々↓そもそも、夫々↓それぞれ、慥に↓たしかに、忽ち・乍ち・倏ち↓たちまち、縦い↓たとい、会々↓たまたま、独逸↓ドイツ、兎に角・とに角↓とにかく、俱に↓ともに、弗↓ドル、頓↓トン、尚お↓なお、乍ら↓ながら、為す↓なす、可し↓べし、略々↓ほぼ、寔に・洵に↓まことに、況して↓まして、亦↓また、儘↓まま、寧ろ↓むしろ、若し↓もし、齋す↓もたらす、固↓もと、聽て↓やがて、已む↓やむ、稍々↓やや、所以↓ゆえん、漸く↓ようやく、羅馬↓ローマ、互る↓わたる

総説

日本には日本特有の哲学が古代に於いて発生していたのである。日本の古典を精しく読む人は何人もこれを否定することが出来ないであろう。しかしその後儒教が伝わり仏教が輸入されて、この古来の哲学を中樞としてよくこれ等の要素を摂取し、日本哲学は発展してきたのである。

西洋の哲学が日本に伝わったのは大体に於いて徳川政府末期以後のことであった。時は恰かも幕府を仆して朝権を恢興し開明の政治を要求する国民運動の熾であった際であつたから、西洋哲学もまた動員せられて、幕府打倒、封建制打倒のために有力な思想的支持を与えたのである。かくしてここに日本に特有な啓蒙哲学が組織せられた。日本哲学は一段の進歩を遂げたのである。

維新後もこの一派の活動は続けられた。そして開化主義、進歩主義の為に大きな足跡を残した。明治六年になると、彼等は明六社を組織して「明六雑誌」を刊行し、啓蒙運動は更に一段と昂まつたのであるが、政府の言論取締の余波を受けて二年後には啓蒙活動を中止しなければならなかった。しかし単なる社交機関「明六会」はその後も約二十年間続けられ、この一派の交際の篤きを想わせるものがある。

しかるに学問的団体としては、明治十二年十一月、東京学士会院を組織して再び活動を開始したのである。東京学士会院はタヴァット・モーレーの建議により、文部大輔田中不二麿の斡旋と人選によって先ず成立したのであ

るが、これは実質に於いて明六社の再組織と見らるべきものであった。明六社の主要なる会員七人が最初の会員であった。福沢諭吉、西周、津田真道、加藤弘之、箕作秋坪、中村正直、神田孝平がそれである。当時の日本を代表する学者としてどの一人に就いて見ても人格識見共に傑れた人であった。

彼等は「東京学士会院雑誌」を刊行した。しかし当時は政治論の紛糾した時代であった為に、彼等は「明六雑誌」の先例もあることではあり、政治論には全く触れずに、専ら教育及び学芸技術を討議し、それを誌上に掲載するのみであった。しかもこの時代になると、各派の哲学説が並び起っており、会員もまた和漢洋を専攻する人にわたっていたので、「明六雑誌」に見らるる如き生彩と統一とに欠くる所はあったものの、それでもなお会院の主潮流は旧明六社会員の占むるところとなった。学説もまた旧明六社時代の延長に類するものが誌上に掲載せられていた。この雑誌もまた「明六雑誌」の延長であったと見ることが出来るのである。

これ等の学者の中には哲学とは関係のない人もあったが、西周を首として津田真道、加藤弘之の如きは西洋哲学をよく咀嚼して、これを日本に初めて伝えた人々である。福沢諭吉や中村正直も日本の啓蒙思想に寄与する所が甚だ大きいのであるから決して哲学と関係が無いとは言えない。西洋哲学はこれ等の人々によって日本の土に移され、その後の発展の基を拓いたのである。

この学派は何時まで続いたかと言うと、明治十年頃までが最も存在の意味のあった時代で、その後学派としては僅に余喘を保つに過ぎなくなり、明治二十年代には活動が終息し、三十年前後にはこの学派に属した人々は相次いで死歿した為に学派も従って全く消滅したのである。只だ加藤弘之は年齢も約十歳余若かったのと非常な養生家であったので、大正五年までも長命を保ち、学説もこの学派の標準的なところからは逸出したけれども、この学派の一発展と見て差問題のないのである。この学派は明治維新に哲学の方面から寄与した。その開明主義と進取主義は明治政府の進歩的方面を代表してすこぶる貢献するところが多かったのである。しかるに維新の事業を

総 説

成しとげて次の段階に移る時になると、この一派の学説はそのままでは一部は有害になり他の一部は殆んど無用になった。これは維新の大功臣であった西郷南洲の存在とよく似ている。只だこの下級士族出身の哲学者達は西郷の一派のように武力に訴えてまで存在を主張しようとせず、却って、言うべきことも差控え、時には加藤弘之のように学説を換えて、時代に対する順応性を忘れなかったところに相違が存するのみである。

次にこの学派の特徴について一言して置こう。

一、この学派に属する人は一度は凡て専門的に漢学を修業した人である。福沢諭吉のように四書五経は腐れたりと云って儒教を排斥した人でさえも青年時代には漢学を修業している。決して門外漢ではない。その他の人に至っては漢学者としても一家を成し得る程修業を積んだ人々のみであった。

二、この学派の人は全部がオランダ語を研究した人であった。大概はペルリの来航によって外国の学問をやる必要を感じオランダ語を急速に研究したのである。彼等はオランダ語によって外国の文化に接し、その他の国の言葉を研究するにしてもオランダ語の力を藉^{かり}したのである。彼等は後々までも、法律や哲学を研究するにあたって先ずオランダ語によつてものを考えている。明治時代になつて教育を受けた人にはかかる事実は全然ないのである。

三、しかし彼等はすべてオランダ語の外に歐洲の言葉を研究した人であった。西周、津田真道は夙^{もと}くも英語を研究して蕃書調所の教授となつた人であり、福沢諭吉、箕作秋坪も早くより英語を修めた人であった。加藤弘之は万延頃よりドイツ語を研究して日本に於けるドイツ学研究の祖と言われる。明治維新後はオランダ語が全く没落したので、外に外国語を知らない者は困却したであろうが、これ等の人々はオランダ語の外に色々語学をやつていたので研究上の便宜は図り知り難きものがあつた。しかし彼等の語学研究の態度は、読むことに重きを置き、話すことは大して問題にしていなかった。通弁型に対し学究型又は読書型と言うべきものであつた。従つて外国

の土地を踏んで会話の修練をした人の外は話す、ということは不得手であったように考えられる。加藤弘之はドイツ語を読むことも書くことも出来たが会話は出来なかったということである。又、西、津田兩人がオランダに留学した折の如きも会話は同僚の海軍士官赤松大三郎の方が遙かに上手であったと伝えられている。英語の練習は発音が難しい為に、アメリカから帰って正式の発音を伝えた中浜万次郎の門を叩いて発音を教わった者が多かった。しかし当時の青年学者達は中浜を学者として推尊する者は少くてむしろ単に呼法（発音）の大家として通訳型の人間としか考えていなかったようである。書物を読んで理解することならば中浜等に倣はとらないと考えていたのである。明治になって大成した人には通弁型の人よりも学究型の人の多いことは言うまでもない。

四、彼等はすべて百科全書的知識の持主であった。彼等は和漢洋の書籍を読む上に、人文科学や自然科学の知識を取り入れていたので、極く浅くともまことに広い範囲にわたって色々なことを知っていた。啓蒙哲学は大概そういう性質をもっているが、この人達もまた典型的にそういう特徴をもっていたのである。この点から日本百科全書派と呼ぶことが出来る程である。

五、その哲学の外面的な一特徴は和漢洋の混和哲学であったということである。西洋の学説もこれを日本在来の哲学や支那哲学の事実と彼れこれ考え合せて理解し、表現している。決して西洋思想の直訳ではない。直訳哲学はむしろ時代が下る程著るしくなるのである。福沢が如何に判り易く書く為に努力したかは有名な話である。これは即ち如何に新しき思想を日本人の為に消化せしめるかという努力であって直訳とは全く反対のものと云わねばならぬ。又中村正直の訳書が如何に日本化されているかは原文と訳文とを比較して読む者の齊しく認むるところであろう。直訳哲学の発生は日本のいわゆる講壇哲学が発生して後のことで、明治三十年後に尤も熾（さかん）となるのである。この時代の哲学は西洋の実証主義と支那の開化的民本思想と日本の古典に見ゆる「神つどひ神はかり」の思想とが混和して構成されたものであった。明治初年の哲学に対してこれを単に西洋の影響のみから考え

総説

ることは未だ真相を掴んでいないのである。従って、五箇条の御誓文中の第一条「広く會議を興し万機公論に決すべし」も決して西洋の民主主義思想の模倣とのみ見ることは出来ない。日本には古代から會議思想が既に存するのである。ここでもまた時代に適わしき哲学が日本在来の哲学を枢軸として展開したと考えねばならない。

六、この学派の栄えた時代は哲学思想としてはこの学派のみが単一な存在であって、これに対立し得る有力な学派は他には存在しなかった。勿論、和学派や漢学派はこれを洋学派と呼び、戦いを挑んでいたけれども哲学的に見る程の何の成果もなかったのである。「鎧を着た武士」が「近代装の兵士」に打敗されたのは鳥羽伏見の戦であったが、同様に「鎧を着を着た思想」は「近代的な思想」の敵ではなかったのである。哲学派としては明六社派は単一な存在であった。明六社員でなくとも哲学的に仕事をした人は殆んど凡て明六社によって代表されていた思想と同一の潮流にあったのである。「万法精理」(「*セツラスキユ」)の訳者何礼之(「がのりき」)の如きもその一例として上げられる。誰もが啓蒙的、実証的、開進的な人であった。この時代にもっと別の哲学が移入されても一顧もされなかったに違いない。明治十年以後日本を風靡するに至った進化論が明治初年に流入したとしてもこのような差別思想は平等思想の旺(さかん)であつた時代には迎え入れられなかったであらう。

七、この時代の学問は實際政治と深い關係をもっていた。また学者そのものが政治に關係していた者が多かった。そういう時代であるから学者が単に攻学のみに没頭するということは不可能であつた。徳川政府時代には彼等は教授職であつて学者として立っていたのであるが明治政府の時代になると實際政治に干与している。従つて政争の渦中に捲き込まれるというようなこともあつた。またその背後に薩長の有力な政治家を控えていて、その協力者又は顧問という如き地位にあつた人が少くない。西、津田の両氏が山県有朋の顧問であつた如き、加藤が木戸孝允、伊藤博文等長州閥と親近者であつた如き、又政府の仕事と關係しないでこれを指導するという立場にあつた福沢が前に大久保甲東と親しく、後には大隈重信と深い關係を結んだ如き、この時代の学者は多くは政治

的地位の-high官吏であつて實際政治に携わり、その運営に与つていたのである。

八、彼等の多くは蕃書調所（開成所）の教授職にあつた人々である。もし徳川政府がそのまま存続したならば、彼等はここに於いて学問の攻究に従事したことであらうが、徳川政府は瓦壊し、明治政府の大学は極めて幼稚であつた上に派閥の争いが劇しかった為に、ようやく明治十年に到つて真の意味の大学が創設せられた。しかしその時には以前蕃書調所の教授であつた人々は大半有力な元老院議員とかその他政治的地位を占めていて、大学の方に關係することの出来た人は加藤の外幾干もなかつたのである。従つて明治十七年に哲学会が組織せられた際、最初の有力な会員であつた者は多くは官吏であつて教授ではなかつたのである、しかし大学に關係がなかつた訳でもなく教育に従事したことのない人でもない。彼等は一昔前の大学に關係していたのである。

九、この学派を組成した人はことごとく医者とか兵学家の家に生れてゐるか、とにかく、下級士族の出身であつたという点は一致している。そして地方の小藩に育つた人も一度は幕府の文化的事業に關係したことのある人か、又は直参に取立てられ、幕府に奉公したことのある人が多い。東京学士会院の最初の会員であつた人は七人ことごとくかつて幕府の吏僚であつた。この事實は徳川政府が経済不振の中から、如何に有用な人物を養つたかということを示すものと言わなければならない。しかし彼等の学説そのものは封建制の打倒というところにあつたので、必ずしも徳川政府存続の為に役に立つたとは言われない。むしろその反対であつたであらう。その点は何れにしても文化史的には徳川政府の功績というものは甚だ大きいのである。

一〇、彼等の社会的地位は官にある者も野にある者も大概似たようなものであつた。年齢も殆んど同年配の人が多かつた。出身の経路は同様であるし、地位も年配も相似ていたので、日本の百科全書派は一つの纏まつた集団であり得た。内部に対立というようなものはなかつた。個人差と呼ぶべきものはないが、学説の上では似よつたものである。しかしこの学派が段々存立の理由を失つてくると共に、個人差は甚しくなつて遂に種々

総 説

の分化が起った。加藤が進化論を唱え、西村茂樹が修身学に没頭し、中村正直が漢学に復帰するなどはことごとく分化運動の表れであった。しかしその分化は明六社の母胎から出たものであるだけに、どこかに一脈の似た所があつて在朝在野の対立というような劇しいものとはならなかった。その故に、東京学士会院などが成立するところが出来たのである。しかし中江兆民の如き全く別系統の哲学者が起つて有力な啓蒙運動を開始するにあつて、哲学上に初めて在朝在野の別が岐れたのである。

以上は日本百科全書派の外見的な特徴である。次に彼等の哲学の内面的特質について少しく窺つて見よう。

一、彼等はヒューマニズム的傾向の学者であつた。啓蒙哲学者は何処の国でも大底はヒューマニズム的であるが、日本の百科全書派もまた他のいづれにも劣らずヒューマニズム的であつた。この流派が昌^{さか}であつた間は誰もこの信条の下にあつたが、日本に流入した進化論は天賦人權説に鋭く対立しなければならぬという必要からささるる強権的、暴力論的な変容をしていたものであつた為に、進化論の興隆とともにヒューマニズムの色彩は全く淡いものとなつてしまつた。そしてヒューマニズムの信条は在野派の哲学者によつて護られるに到つたのである。

二、彼等は実証論者、経験論者であつた。それによつて封建的な觀念論に対して戦うことが出来たのである。封建時代の迷蒙主義的な無批判的な立脚地に対して、彼等は経験に即し、實際的証拠を以て向つたのであるからその間の優劣は殆んど問題とならなかつた。如何に封建制の強圧に狎^なれた人であっても、迷蒙や無論拠の議論を聴くものではない。この学派の方向に時代は流れたのである。しかし認識論や論理学というような学的な方面に進んだ人は西周位のものであるが、世界観、人生観の立場に於いては、この学派の人は挙げて実証論者、経験論者であつた。

三、彼等は何れも自然科学の信奉者であつた。いづれも百科全書的知識の持主であつたから、自然科学にも一

通り通じていたことは言うまでもない。しかし特にその学説の証明に自然科学の方法を幾分なり採用して、それが論述の効を奏しているのである。特に福沢の如く自然科学に関する著書のある人もある。神田孝平や西周は人類学、考古学（通古学と言う）の問題にさえ明治初年に於いて既に触れているのである。自然科学の知識に依拠するということがこの学派の一特長である。後年加藤弘之が天賦人權説から社会的ダーウィニズムに転向した際、特に自然科学の立場に立たねばならぬと主張したのは、この学派に自然科学的要素が欠けていたものであるように言うのではなく、より多く、より新しき自然科学即ち進化論に依拠しなければならぬと言ったものと解釈しなくてはならない。

四、彼等は封建的道義観に対して経済主義を対立せしめた人々である。彼等は武士の出身であるから武士の礼義作法には通じていた筈である。しかし武士階級の道義観が封建制の維持にしか役立たず、却って時代の進歩を礙（さまた）げるものと見ていた者も少くなかった。そして彼等は経済主義を対立せしめていたのである。武家階級は禄高によって一応生活は安定していた訳である。従って経済問題を論議する者は武士の風上に置かれなかった。しかるにこの学派は時代の必要に迫られて大いに経済主義を主張した。福沢の如きは代表的な人物であった。これに反対する人は功利主義とか拝金宗とか言って批難したのであるが、これは却っていまだ旧弊から脱することの出来ない人々であった。彼等は決して利我主義者などではなかった。西洋の功利主義を日本の時代に適應するように改変して論じていたのであって、西周などは一種の功利主義的倫理学を樹てているけれども決して西洋の学説を踏襲したものではなかった。彼の倫理学では知識、誠意などが幸福の原則として認められている。物質的欲望を以て最高の理想とする如き倫理説とは甚だ異なるものであった。前にも言ったように、彼等は特殊な混和哲学を構成していたのである。

五、当時はなお未だ大小を腰にさし、特権階級たる武士は農工商の庶民に対して斬捨御免の権をもっていた。

総 説

磨刀が実際実現せられたのは明治六七年頃のことであった。こういう事実は進歩的思想家達の黙することの出来ないところであった。従って彼等はいかかると主張した。この間に四民平等主義や人格主義が現われてきたのである。この問題の為に森有礼は磨刀の建議をし、加藤弘之等も種々建議して実現を期した。しかしこの範囲で特に鮮やかな議論を述べた人は津田真道であった。津田は磨娼問題、人身売買禁止問題、婦人の地位の向上、拷問排斥等の為に大いに論じたのである。人身売買の禁止（明治五年）の如きは津田の建議が効を奏したものと見られている。すべてこれ等のことがこの学派の特長である。

SAMPLE
Shoshi-Shinsai.com

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第
一
編

序

論

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第一章 西洋哲学渡来前史

我が国に西洋の思想が伝来したのはキリシタン宗の渡来（一五四九年）と同時であったと言わねばならぬ。キリシタン宗的な人世観や世界観は日本に在来あったそれとは甚だしく異質的であったのであるから、それ等異った二つのものが幾分なり融合する迄には、儒教や仏教の伝来した当時と同じような闘争が展開せられた。しかしその闘争の後にキリシタン宗は我が国の各社会層から欣び迎えられて、織田信長の頃信者の数は約十六万に達し、その文化発展の為に豊饒な土地を見出したのである。一切の経過は宗教史の詳細に説明すべき範囲に属するが、哲学的に見てもキリシタン宗が次第に教化を高めていったならば、遂には西洋のスコラ哲学及び神秘哲学の移植にまで及び、日本人にしてこの方面に業迹を残すに到る程の者も現れたことであろうが、そこまで及ばないうちに豊臣秀吉の禁令となり（一五八九年）、最後に島原の乱（一六三七年）となってキリシタン宗は日本の文化史上から全く影を没してしまったのである。しかし日本に於いて啓蒙及び教化の為に刊行せられたキリシタン関係の文書の中には間々哲学と関係深き文献も含まれていた。例えば慶長十五年（一六一〇年）四月京都の原田アントニョの印刷所から発行せられた「こんてむつすむん地」は、フランドルの神秘哲学者トマス・ア・ケンピス（Thomas a Kempis, 1380-1427）の原著「キリストに倣いて」（De imitatione Christi）の邦訳である。この書物は元来宗教的性質のものであることは言を俟たないけれども、又一面に於いては中世末期の哲学としても、よ

第1章 西洋哲学渡来前史

くその時代の性格を顕したものととして注目すべき文書であるから、この書の訳者には西洋神秘哲学の紹介者としての功績を認めない訳にはゆかない。しかるにその訳者の姓名が伝わっていないのは甚だ遺憾なことである。

この外にもキリシタン関係の刊行物中には哲学の領域に接近したのもも尠くないけれども、哲学そのものは未だ輸入せられもしなかったし、又求めせらるる違もなかった。西洋哲学の研究はこの時代に既に着手せらるべき充分の条件を有しながら、政治的禁圧の為に全く未成熟に終ったのである。

キリシタン関係の外にも世俗的な人達によって西洋哲学が我が国に流入するという状況は既にこの時代に關けつつあった。この時代に我国と貿易を営んでいた諸国人のうち、西洋の書籍をもたらしたのも幾人かあるように考えられるが、それ等のうちに偶然的にも哲学関係の文書も間々含まれていたのである。一例を挙げれば、徳川家康の在世の頃九州平戸に「平戸英国商館」を開いたことによって日本にもその名を知るる最初の商館長リチャード・コックス (Richard Cocks) の日記中には、彼が移入したところの多くの書物の名を伝えているが、その中には哲学に関係のあるように考えられるものも二三見あたるのである (Diary of R. Cocks; Cape-Marchant in the English Factory in Japan 1615-1622, 1880 Ed. by E. M. Thompson.)。その中び「On the city of God」は言うまでもなくアウグスチヌスの著述 (Augustinus; De civitate Dei. 426.) の英訳であるが、さらに一六一七年 (元和三年) 一月九日の条に「Essays」と見えている書物は恐らくイギリス近代哲学の鼻祖と言へべきフランシス・ベーコン (F. Bacon, 1561-1626.) の著名なる哲学論集であろうと推察せられる。その外にもこれに類する事実は幾つか数えられるが、しかしながら、こういう人達によって舶載せられて来た文書が日本に来て果して日本人中の何人かの所蔵となったか、又何人かによって読まれたか、或は又直接もしくは間接に何等かの影響を日本人中の或る者に与えたか否か、という如き問題になると何等明白なことは判明していない。恐らくは全く偶然的な出来事であって、これ等のものがその当時にも又後の世にも影響という言葉の意味するような何

物かを与えていたとは考えられない。しかしかかる偶然的な接触からでも、哲学研究の萌芽は表われ得るものであるがこの方面もまた徳川政府の極端な保護貿易主義と徹底的な文化統制政策の為に、その可能性が全く鎖されたしまった。

その後、徳川吉宗の時代（一七二〇年）に、文化統制策が少しく緩和せられて、宗教に関係のないものならば、オランダの語学と文化に限ってこれを研究することが寛大に取扱われるに至った為に、これより以後、種々の制限を受けつつも、オランダの語学及び文化を研究する者が続出して、後のいわゆる洋学派と呼ばれる系統が樹てられる状態となった。しかし洋学の内では当時はオランダ学に限られていたのであるから、これは当然蘭学派とも称せられたのである。爾来幕末に及ぶまで、蘭学は年と共に隆盛となって、天文学、医学、物理学、数学、殖産の如き範囲に蘭学の寄与した功績はまことに測り知り難きものがあつた。又、次第に年月の下ると共に地理学、植物学、兵学の如き方面に関する著述も蘭学者の手によって上梓せらるるようになって、我が国の文化は為に面目を一新してきたのである、この間に西洋の哲学に関する興味という如きものが起つてきそうに考えられるが、蘭学者達の関心は形而下の問題にのみ限られていたのであつて物に即したこと以外には未ださまで深い興味を喚ぶに至らなかつたもののようである。これに就いては、宗教に対する禁圧が甚しかったのであるから自然の勢として哲学の如き形而上的な、従つて宗教的に見られる惧のある問題からは意識的に遠ざかうとした傾向のあつたことも考えねばならないが、一面また日本人の思索の未成熟ということも哲学的研究の容易に起らなかった原因であると思う。日本人は安政以後の蘭学全盛時代に及ぶまでは形及び物に即した問題に就いては、種々の思索や研究を積むことが出来たが、それ以上の精神的問題に立ち至るとなお決してこれを西洋の哲学と関聯せしめて思弁するまでに成熟しなかつたのである。自然科学的方面の知識が相当豊富に流入してきてしかる後に精神科学の方面にも探求の欲求が漸次に開けてきたのであつて、それまでは西洋の精神科学に接していても未

第1章 西洋哲学渡来前史

だそれにかかるものとして享け入れる余地がなかったものの如くである。西洋の影響を受けて自然科学の方面からや自然哲学と呼ぶべき領域に接近した西川如見、本木良永、志築良雄の如きも哲学の領域には這入り得なかったし、さらに一步を進めて性格的に哲学的思弁の素質を有していた帆足万里、鶴峯成申も西洋哲学と接触するの機会をもちながらなお未だその方面には進み得なかったのである。蘭学者の中でも特に医学の方面の人が古くよりギリシャの医聖ヒポクラテス (Hippocrates) の名を知っていたのと同様に、これ等の人々はターレス、ピタゴラス、ケプレル等の名を知り又その業績の一般に通じていたにも拘らず、全く天文学者又は数学者としての一面のみを伝えて、それ以外のものとしては何も知らなかったし、又知ろうともしないような実状であったと言うことが出来る。これ等の事実から見て、日本の西洋文化研究は未だ哲学を考究し得る段階にまで進んでいなかったと解釈せらるべきであろう。しかしてそれが少しく可能になったのはペルリの来航によって促された安政の開国以後、東西の交通がようやく熾さかになつて、西洋文化の研究が急速度に嵩まり、それ以前の総和よりもさらに大きな収穫を得るに到つてからのことであつて、それ以前は時として肯定的に又は否定的に精神科学の方面に触れる者があつても主として「紅毛談」の如き道聴途説とでも言うべき類に外ならなかった。

〔註〕 太田南畝の「一話一言」第四十三巻に「二人ニヒト狽カサネ師シ湮カサネ壳カサネ娘ムスメ」及び「オンゲデルディヒ」(Ongeduldig, 性急者)と題して、オランダ人が出島で演じた素人芝居の筋書を記したものが二篇残っている。これは長崎奉行であつた筒井政憲が任期を終つて長崎を引き上げる際に飲送の意味を以て上演せられたものであらうと言われている。(文政三年——一八二〇年——九月二十四日上演)。しかしてこれが上演せられた時、舞台の正面に「芸は長く、命は短し」(De Kunst is lang, het Leven kort)と書かれていたということである。ヒポクラテスのこの言葉は日本の蘭学者間には遍く知られていたものであるから別にこれを問題とするに足りないけれども、これを医術でなしに芸術と結びつけて使用したことはそれが譬いオランダのカピタン、ブルムホフ (Blomhof) の如き文筆の士のなしたことであつたにせよ、我が国に於いては一の新しき使用例と

言うべきであろう。芸という文字そのものは支那の古典に古くより見えているが、西洋の De Kunst, art の訳語として使用している点も注目すべきであろう。芸術の問題は明治の初年に哲学者によって初めて取り上げられ、西周、大島圭介等によって美術等の新造語まで出で来たのであるが、かかることをなさしめた準備は蘭学関係者中に於いて夙くより整っていたものである。なおこの二篇の筋書は「一話一言」以外に「喁蘭演戯記」と題して「海表叢書」第二巻にも収載せられている。原文はオランダのマルツッハ (Malbath) に抛り、これを翻案したものであつて、宇田川榕庵の旧蔵書中には原書と共に自家の翻訳草稿も残されている。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第二章 新大学（蕃書調所）の設立

ペルリの来航（一八五三年六月）は鎖国政策を固守していた徳川政府に多大の愕きを与えたものであった。政府はこの事件の為に従来の政策を変更することを余儀なくされて、これまで極めて小規模であった外国文化の研究及び翻訳の機関を積極的に拡大するという方針に転じ、速に実現に着手した。これまで浅草の天文台内に置かれてあった翻訳局「蕃書和解方」（文化八年（一八二一年）五月設置）を独立の機関として整備拡張し、名称をも「洋学所」と改めて、九段阪下竹本主水正屋敷跡に移し、古賀謹一郎（茶溪）を頭取に任じてこれを主宰せしめた。そして又別に筒井政憲、川路聖謨、岩瀬修理等をもこれに参与せしめて速に成績を挙げようと企てたのである。時に安政二年（一八二五年）二月のことであった。

しかしながらなおこの程度の設備では時代の要求に合致することが出来なかったので、翌安政三年二月十一日に洋学所を「蕃書調所」と改名して更にその機能を強化し、人員を増加して、従来の如く単にオランダ語及びオランダ語を通しての西洋文化を講究・翻訳するのみでなく、新に学徒を募集して教授することをまた始めたのである。ここに西洋文化研究の為に官立学校が初めて産れ出で、一般に外国文化の研究と教授とをなす所の道が開かれたのであった。これは正しく我が文化史上の一の劃期的事実と言わなければならない。開校式を挙げたのは安政四年（一八二七年）一月十一日であって、十八日に開校し、当時の生徒数は幕府の関係者のみで百九十一名を数

えた。教師の方は、安政三年（一八二六）四月四日附で筆作阮甫と杉田成卿とが教授職となり、同日附で川本幸民、高島五郎、松木弘安、手塚律蔵、原田敬策、田島順甫等が教授手伝として出役したのである。翌四年五月四日には又々人員の増加があつて、津田真一郎、西周助、其他の者が教授手伝並に任ぜられた。

しかし蕃書調所は決して単なる洋学の研究所でもなければ又単なる学校でもなかった。これは西洋流の軍隊教練の機関として設置された講武所と並び置かれたものであつて、講武所が西洋流の武事を掌る所であるに對し、蕃書調所は西洋に関する文事を凡て司つていたのであつて、今日の学校という意味の外に、外交的機関としての機能をも有していたのである。例えばアメリカの総領事ハリスの江戸訪問（安政四年（一八二七）十月）の際の如きは、學生を一時麴町の和學所に遷してここをハリスの旅館に當てたという如き事實のある所から、王朝時代の鴻臚館に類する一種の外交的機関としての意味のあつたことが想像される。又、ジーボルトの二度目の日本來遊（文久二年（一八六二）五月）の際の如きには蕃書調所を訪問して、かの「蒙古王ジンギスカンは源義經である」という説を述べ拓本等を並べて力説これ努めたものであつた。當時この外人の説を聴いた教授達のうちで手塚律蔵（瀬脇寿人）は深くこれを信じ、明治十年頃ウラジオストクの貿易官として駐在した當時にも、義経Ⅱジンギスカン説を裏書する為に資料を蒐集していた程であるが、その門人であり、當時新進の洋學者であつた西周助等はジーボルトの説を聞いても何等その眞實性を認めない上に、却つてこの外人が日本に誤^{まちが}うたにかかる奇矯なる説を立てたものとして一笑に附してしまつてゐる。それに関する是非の論はしばらく措くとして、ジーボルトが蕃書調所を訪問したというような顯著な例によつても知られる如く、これはまた対外的な文化交渉の機関であつたと解釈せられる。

さらに又、蕃書調所は出版の事業をもやつてゐる。安政五年（一八二八）五月二十二日に榊令輔と言う者が活字御用出役を命ぜられて、ここに初めて活字方が設けられるようになり、同じ九月十四日には加藤鱗之助が書物御用

第2章 新大学（蕃書調所）の設立

出役に挙げられ、書籍出版の陣容を整えたのである。これによって刊行されたものは辞書、文法書等教科書の性質を帯びた書物が大部分を占めていた。即ち蕃書調所は出版文化にも貢献しているのである。これ等の事実によって知られることは、蕃書調所は本来外国語の研究教授及び翻訳を使命としたものであったが、時代の要求に随って、次第に学科の内容を豊富にし、又一方では広汎なる文化機関としての活動をもなしたということである。換言すれば、次第に総合大学としての組織に改変し拡充していったのである。開校当時（安政三年（*1850）十二月）の規則覚書中に、「両文典籍古本銘々持参可有之候」と見えているが、この両文典とはオランダ語及び英語の文典のことであるから、蕃書調所のそもそも創設当初の目的は蘭英両国の文法、読法を教授するところにあつたのであろうけれども、後にはフランス語（安政五年（*1852））もドイツ語、ロシア語（万延元年（*1860））も教授せらるることとなり、さらに物産局（文久元年（*1861））、洋算（文久三年（*1863）二月）、化学（慶応元年（*1865））、絵図方等の諸学科が次第に追加補充されて、段々と総合大学としての機能を充分具備することが出来るようになった。蕃書調所はこの意味から言つて正しく我国に於ける近代の大学の出現であつたと考えられる。

大学という名称は湯島の昌平黌^{ちやうへい}に附けられていたものであつたし、林家は代々大学頭として昌平黌の学長であるのみでなく又学事一切を管掌していたのであつたから、蕃書調所は公然と大学と呼ぶべきでなかつたことは言うまでもないが、實質に於いてはこれを日本に於ける新しき大学の出現であつたと見て差^さ聞^きえないであらう。昌平黌の学問は官許の朱子学であつて、長い伝統と巨大なる学派とを有していたことは言うまでもないが、支那の哲学は概ね支那民族の習性と深き聯関があつて、これを離しては考えることの出来ない所の地方的^{てき}民族の哲学に外ならなかつたのであるから、日本が新^{あらた}に世界的舞台に登場してきた後は、この地方的^{てき}民族の哲学は最早新しい時代の指導力とはなり得なくなつてきつたあつた。伝統の力というものは鞏固である上に、幕末にも傑れた漢学者が幾人もあつて、学問も解釈哲学である所の朱子学の外に、行動哲学としての陽明学も講究せられていた

次第であつて、一部の革新的氣運には甚だしく歡迎せられていたのであるから、支那学の潛勢力はなお余程巨大であつたと言わねばならないけれども、これは如何にしても民族的科学に外ならないが為に西洋伝来のより、國際的な従つて時代の要求により適合した學問に対してはようやくその席を譲らねばならないような傾向をいかんともすることが出来なかつた。これを換言すれば、昌平黌は學問の指導的實質を失いつつあつたという点に於いて、その位置を著書調所に譲るべく余儀なくされていたのである。この事実上の新しき大学は文久二年（一八六二）五月に一橋門外の新校に移転すると共に、「洋書調所」とその名を改め、翌文久三年二月にはさらに「開成所」と改称せられ、その校舎も神田小川町に移されて幕末明治に及んだ。このように度々移転したのは大学としての機能を外形的にも内容的にもいよいよ強化する必要に迫られてのことであつたと推察せられる。

著書調所が新大学としての機能を次第に強くしていったことは校舎の増設や学科の増加というような外形的の方面でなく、學問の研究方法上に一大変化をもたらしたという事實によって窺い知ることが出来る。それは專攻学科の分化ということである。従來の學問研究法に於いては、和學、國學、洋學の區別があり、和學の中でも歌學とか伝記類の別があつたし、漢學の中でも經學とか史學とかの區別が立てられていたのみであつて、今日のいわゆる「専門」という概念は未だ起り来らなかつたのである。洋學に於いても最初の間はこれと同様であつて、和蘭通詞の役にある者は西洋万般の事物に通じ、語學もまた何語であることを問わずに凡そ横文字で書いた文書は和蘭通詞によつてことごとく読破され得るものであるかに考えられていた。オランダ通詞も偶にドイツ語等の如き見馴れない國語に接し、訳読を命ぜられる等の場合にはこれを「ラ、テン、語」にていささか難解であるけれども意味は判る」というような遁辭を以て職責を全うしていたのであつた。

しかし外國文化の研究が高くなり、範圍が汎くなるにつれて、西洋關係のすべての事物に通曉するという如き、淺薄な百科辭書の常識では一時を糊塗することさえも出来なくなつて、その結果學問の専門化ということが行わ

第2章 新大学（蕃書調所）の設立

れてきたのである。かくして一定の範囲を限って特に深く研究する方法が起ったのであるが、それを学域と云い、かくして研究せらるる学問を学科と呼んだのである。しかしこの学科という言葉には単に種々の学問というような普通の用法もあるがために更にこの新しき意味を強く表現しようとして科学という言葉が出現したのである。今日の別の言葉を以て言えば、個別学、専門学の意味に外ならない。かかる学問の分業的意識は蕃書調所に於ける学問研究の方法上に初めて顕われ、且つ幾分かは実行されたのであった。蘭学、英学、仏学、独学というような専門化もその一つであるが、別に語学の外に出でたる専門化、分業化が行われた。例えば博物学（物産学）、舍密学（化学）、算学（数学）という如き分化がそれである。この方を主として当時にも専門学と言っていたのである。「専学は不馴れなれども仏語は可なり出来る」（『新聞叢書』）等の意識はこの時代から一般的になってきた。尾張の人伊藤圭介は召されて蕃書調所物産局の教員となり、文久元年（一八六〇）十月から同三年八月迄その職にあった。続いて神田孝平（孟恪）は文久三年（一八六二）数学局の教師に任ぜられて洋算教授の嚆矢をなした。又、理学、化学の教師には蘭人ガラタマ（Garama）を招いてこれに当てる等専門化の趨勢がやや明らかに認められる。従って、洋学者と言えば西洋の文物制度の万般に通じていると考うる如き見解は、ここでは漸次更められつつあったのである。この傾向が精神科学の方面にも及んで、東洋のいわゆる性理学に匹敵する学問を西洋の文献によって研究し、思索しようとする活動が始められて、遂に西洋哲学研究の端緒が開かれたのである。我国に於ける哲学の研究はこの新しき大学の創立によって先ずその機運が促され、次に学問研究の態度に変化を生ぜねばならなかったところに必然的に興ってきたのであった。

第三章 学徒の海外渡航

徳川政府の政策が外国との経済的及び文化的交渉を肯定するという政策に一転し、修交条約の締結を見て以来、西洋諸国との交渉もすこぶる繁くなり、書籍の舶載せらるるものも次第に多くなってきたが、又それと同時に我が国人の海外に渡航するの途も拓けて、東西の交通は日に月に繁きを加うるに到ったのである。それ等の交通者の中には学問のあつたものも決して^{すくな}少くなかったので、これ等の人々が次第に海外の文明開化の風を摂取してきた為に、この方面からもまた新しき学問の生長を促すに足るべき要素が充実してきたのである。特に万延元年（[※]1860）我が国の外交使節が初めてアメリカ合衆国を訪問して以来、明治初年までに数度にわたって公式の使節が彼の地に渡ったのであるが、その際随行を命ぜられた者の中には当時の新進学徒が少くなかった。そこでそれ等の者が海外の当時の高度文明に接して、洋風、洋学の長所を親しく体験してきて、それによって我が国の学風上に少なからぬ変化を起すに役立ったこともまた疑いを容れぬのである。

万延元年（一八六〇年）に政府は修交条約の批准交換の為に、親見豊前守正興を正使とし、村垣淡路守範正を副使とし、小栗豊後守を監察とし、これに多くの従者が随って、アメリカの軍艦ポーハタン（Powhatan）に搭乗して太平洋を渡航したのである。なおこの時、軍艦威臨丸を軍艦奉行木村撰津守芥舟の指揮の下に随行せしめた。艦長は勝麟太郎（安房）であって、一行中には赤松大三郎（前名高橋三郎）、肥田浜五郎等も加わり、中浜

第3章 学徒の海外渡航

万次郎は通弁として従った。

後年、啓蒙思想家として異常の活躍をなした福沢諭吉はこの時特に御軍艦奉行木村摂津守の許可を得て、その従者としてアメリカの土地に渡ったのである。この一行は或は議會を見学し、或は博物館を訪うなど、アメリカの高度の物質文明に接し、その施設の宏大、精緻なるに驚嘆したのであるが、特に福沢諭吉は中浜万次郎と共に、各々ウエブスターの辞書一部を購入して帰朝し、無上の宝物の如くに考えたと言うことである。幕末より明治にわたっての福沢諭吉の啓蒙思想は、これ等の実地見学によって多分に涵養されたものであろう。福沢諭吉は決して哲学者ではない。しかし広く啓蒙的思想、特に英米の功利主義的見解に基づく啓蒙思想を以て、封建的・守旧的思想、特に支那学的超俗思想に打撃を与えた点に於いては、幕末及び明治初年の代表的思想家と言われなければならない。その文章の平易にして何人にも読み易く、論旨平明にして行文の熱を帯び、多くの人に感激を与えたという点に到っては、当時何人も彼に比肩し得るものもなかったのであって、そういう意味からは彼を啓蒙思想の宣伝者であったと言うことが出来るのである。福沢諭吉のかかる性格は如何なる所から由来したものであるか、勿論明白に指摘し難いのであるが、或はアメリカの物質文明に夙くも接して、そこに日本もまた速にかかる文明の恵沢に浴せねばならぬという進路を認めこれを高く評価したところから、新文明の推進者となろうとする信念が生れたものであろうと推察される。

福沢諭吉は、天保五年（*一八二八）十二月に豊前中津の藩主奥平家の藩士福沢百助の第五子として大阪の倉屋敷に生れた。若くして白石常人に就いて漢文を学んでいるから、彼もまた決して漢学の門外者ではなかった。次で長崎に游学して櫛林栄七郎に蘭学の初歩を学んだ後、大阪に帰り、緒方洪庵に就いてさらに蘭学を修行したが、天稟の才があったものと見えてその進境は甚だ著しかった。安政五年（*一八二八）には江戸に出て、江戸藩邸の蘭学塾に於いて教師に挙げられた。彼はしかしオランダ語が世界的通用語として英語よりも廻かに劣ることを知り、

安政六年（1829年）頃より森山栄之助（多吉郎）に従って英文の読法を研究していたのであって、それが今度の外遊に際しては実際の用に役立ったのである。一行のアメリカに於いて獲た智識は各方面にわたったが、特に小栗豊後守（後上野介）は日本に於いても新聞紙発行の必要あることを痛感して、福沢諭吉に説くところがあったと伝えられている。後年福沢が新聞雑誌の方面に於いてこれを自ら経営し、その紙上に紹介的、宣伝的意見を發表する等大いに活躍するところのあったのは、その源をこの最初の留学に発すると言うべきであらう。

外交使節の第二回派遣は文久元年三月（一八六一年）である。徳川政府の通商善隣政策に対して、薩長等の外藩が鎖国攘夷の政策を執って切りに攻撃を加えた上に、政府もまた勅許を俟たずに早急に通商条約に調印したなどという手続上の一大失敗があった為に、安政六年（1829年）正月に許可した開港場を閉鎖して、貿易を禁じ、再び鎖国しようとするような方針に転じて、その目的を達せんが為に使節が派遣せられたのである。これは政府にとっては外交上の一大難問題であるから、使節もまたこの消極的な、又、時代錯誤的な使命を完うすることが出来るや否や大いに危ぶまざるを得なかった。従って第一回の使節とはその意気込に於いて甚だしく異っていたようである。主席は武内下野守、これに副使として松平石見守、京極能登守を随伴せしめ、欧米六国（米・英・仏・蘭・露・独）に派遣した。一行は凡そ四十人、イギリスの軍艦に便乗して航海に上ったのであるが、その談判は恐らく難渋であろうと察した当局はさらに森山多吉郎にイギリス公使オルコック（R. Alcock）と同道して一行の後を追わしめるという周章ぶりであった。しかし使節の目的は予期の如く達成しなかったが、一行中には鋸々たる洋学者が含まれていて、その人達は本来の使命が極めて消極的であるに反し、個人としては積極的に欧米の新文化に接して見聞を博め、後日攻学の参考となしたのである。定役福地源一郎（桜痴）、御小人目附松木弘安（寺嶋宗則）、反訳方箕作秋坪、同福沢諭吉などは後に我國の文化史上に巨大な足蹟を残した人々である。

この一行の遍歴したところは欧米各国にわたっていたので、その見聞を広めるところすこぶる大きく、従って

第3章 学徒の海外渡航

歐洲文明に対する理解は相当程度にまで深められたことは疑いない。福沢諭吉の如きは後に「西洋事情」を発行し、西洋の事情を紹介して洛陽の紙価を高めると言われた程世に流布したものであるが、この遍歴での一收穫であったと言われるべきであろう。しかしこれはその題名の示すように西洋の文明風習の紹介に外ならないから、思想及び哲学の方面からこれを取り上げるにはやや足りないものであるが、福沢のどの著作もそうであるように、これもまた当年の啓蒙思想的刊行物としては大いに認めねばならぬ。福沢諭吉はその後（慶応二年（一八六六）十一月）に、徳川政府からアメリカに注文した軍艦取引の交渉に関して派遣せられた小野友五郎に従って尺振八（通訳）等と共に事務方としてアメリカに渡った。このように前後三回にわたって欧米の地を踏んでいるので、西洋の事情に通曉している点では何人（たんにひと）の追隨をも許さなかったであろう。従って彼の初期著作はこの西洋文明及び風俗の紹介というところに主点が置かれてあった。前に記した「西洋事情」（慶応二年（一八六六）初冬、三巻）の外に、「西洋旅案内」（慶応三年、二冊）「西洋事情外編」（慶応三年季冬）、「条約十一国記」（慶応三年仲冬）、等の書が表れて、何れも紹介及び啓蒙の文書として大きな役割を果たしたのである。彼は明治時代に下っても、この外国事情の紹介という啓蒙的な活動を停めなかった。「世界国尽し」（明治二年）、「西洋事情第二編」（明治三年）、等がそれであって、如何に福沢がこの方面で訓蒙的な業迹を残しているかの一端が窺い知られると共に、その学風もまた既にこの時代から出来上っていたものであることを推知せられる。

第二回の外交使節はその目的を達することが出来なかったのであるが、この間に国内に於いては輿論（よろん）が更に沸騰して、鎖港しなければならぬという一部の議論が次第に強力になると同時に、進んで外国の商船を撃攘する（きじょう）という如き方向に進んだ。かくて文久三年（一八六三）五月には長州藩が外国船を砲撃して外交問題を險惡に陥れ、七月にはイギリスの軍艦が鹿児島に入寇交戦する等の事件が起って、徳川政府も全く輿論（よろん）を指導し得なくなるし、事態を收拾することも出来ないような、状態が誘致されつつあったので、この年（文久三年）、やむを得ず再び

使節を派遣して鎖港の談判を始めたのであったが、かかる交渉の不可能であることはほぼ明白であるにも拘らず、対内策上かくせざるを得なかったのであらう。主席は池田筑後守、副使は河津伊豆守、河田相模守であつて、随員中には田辺太一（蓮舟）、益田孝等当時の新知識が数えられる。しかしながらこの度の使節も目的を達しなかったことは言うまでもなく、却つて西洋の文化を採用しなくてはならぬという確信を抱いて帰朝し、種々建築するところがあつたので、中には却つてその使命を完くしなかった点を咎められて閉門の罰を受けた者もあつた。當時はあたかもナポレオン三世の盛時に當つていて、フランス文化の尤も殷盛な時であつたので、一行はフランス文化を採用し、フランスに親近するの必要を感じたもののようである。徳川政府のフランス接近策はこの頃から一つの外交方針となつた為に、独り外交上に於いて接近したのみでなく、語学及び西洋文化の研究はフランス語を介して行わるる如き傾向を生じた。輸入される書籍の如きもフランス語のものが、比較的多くなつて、フランスの文学並びに哲学書は既にこの時代から移入され始めていたのであらうと想像されるものが少くない。（それ等の具体的事実に就いては「慶応年間に於ける哲学の研究」の項に於いて再説する。）

政府の親仏政策の顕われとして、その後も外交使節の派遣せられたことが二度程あつた。慶応元年（一八六五）に政府は柴田日向守一行を英仏兩國に派遣した。その使命は横須賀造船所に就いての重要な用件であつた。この随員中には福地源一郎（桜痴）の如き進歩的な人物も再度の外遊として参加していたのであるが、彼等は多く西洋の文化を摂取して歸つた。特に福地は国際公法の知識の必要を感じてこれを講究しようとする意思があつたけれども何分にも基礎的知識が不足して遂に果さなかつたということである。福地の如き稀有の才人であつても旅行の途次、卒然として短時日の間に西洋の科学を学ぶことは不可能であつたのであるし、又一方から言えば、かかる速成的な学習が可能であるかに考えたことは何よりも認識不足であつたと言ふべきであらう。しかしフランス語を学び、フランス文化を多少とも輸入するという点から批評すれば、この使節もまた相当の役割を果した

第3章 学徒の海外渡航

ものと見るべきであろう。

次は慶応二年（※二）十二月に民部大輔徳川昭武一行がフランスに派遣せられた。一八六七年（慶応三年）パリに開催された大博覧会に徳川政府もまた参同して古器物等の類を出品した。又別に鹿児島、佐賀の藩主からも出品があった。この機会に政府はその親仏主義の立場から徳川昭武以下を派遣して博覧会の見物と併せて修交の目的を達せしめようとしたのである。これを輔佐した者は主として攘夷論の牙城とも言うべき水戸の家臣であったが、しかし又一行中には洋学派の人々も加わったのであるから一の奇観であったように見られるが相互に反って得る所があったようである。攘夷派の人々より外に随行した人は御傳役山高石見守、外国奉行向山隼人正、組頭田辺太一、調役杉浦靄山、洋学者としては木村宗三郎、箕作貞一郎（真太郎、麟祥）、渋沢栄一、御用商人清水卯三郎（瑞穂蔵）、四方寺村六左衛門等一行約三十人ばかりであった。フランスに於ては厚遇せられて修交の目的を達した外にこの度もまたフランス文化の輸入ということに就いて大きな使命を果たした事実は見遁してならないであろう。

かくの如く開国以後外国との交渉が頻繁となるに連れて、学徒にして海外事情に通ずる者も出で、外国の書籍も容易に舶載し来ることが出来るようになり、この方面からもまた西洋の学問研究が高度の進歩を見るようになった。哲学の研究もまたかくの如き機運の中に於いて次第に進められていったのである。徳川政府の親仏政策によってフランス語の研究が大いに起り、またアメリカ、イギリスの迫力もあって英語の研究も頻りに進んだのであるが、なお政府の官許洋学中第一位のものはオランダ語である上に、英仏語を学習した者も先ずオランダ語を学び、これに通ずる者が過半であった為に、オランダ語を通して西洋文化を研究するという傾向も決して輕視することが出来なかった。幕末に於いて刊行された西洋精神科学関係の書籍中、多くはオランダ語によって移植せられたのである。オランダ語の媒介から蟬脱して、直接に英仏の文化が、それぞれの国語から我国に紹介され

移植される趨勢は明治維新という政治史上の一大変革以後に於いて極めて隆盛に赴いたのである。それまでは英仏哲学の直接的移植の為の準備がなされていたと言わねばならない。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第二編

幕末に於ける哲学研究

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第一章 文久二年（一八六二年）の哲学講義

外国の文化に接触する機会が繁くなり、これを研究教授する機関として著書調所が設立され、文久年間（一八六〇・四六）に至っては、外国文化に関する日本人の知識はそれ以前の総和よりも遙かに大なるものとなった。西洋文化の研究方法にも深度を加えてきて、形而上的方面にまで研究の手が及ぶようになり、ここに西洋哲学研究の道も拓かれたのである。このことに参与した人々は旧式の学者ではなかった。箕作阮甫とか杉田成卿、手塚律蔵という如き老大家ではなくして、著書調所の若き教授手伝並の諸学者であった。則ち「古き型の学者」はこの新しき学域、特にかの形而上の問題に就いてはその幾分をも負担することは出来ない程、西洋学の流入が激しかったのである。この問題には彼等の後に登場した「新しき型の学者」が必要であった。しかして「新しき型の学者」の中でも、特にこの方面に於いて斬然頭角を擡んでいた者は西周助（周）と津田真一郎（真道）の兩人であった。日本に於ける西洋哲学研究の第一声は西周助の講義案作製ということによって発せられた。この講義案は日本に於ける哲学講義の第一声であることをそれ自体に於いて示しているのである。

「諸君子辱くも僕が講義を聴聞せらるなどあるは喜しくもはた恥しくも。僕が如き浅学にて、なか／＼人間第一のヒロソヒの講義などとは彼の虻に泰山を背負すとかいふものにて、況て講義はイロコエンシといひ、

第1章 文久2年(1862年)の哲学講義

いと弁舌爽かに能く道理の貫く^{トキ}積解^{トキ}ならでは、得も難き事なるをや。それに才力をも計らず、学力をも弁へずして、かの先生ぶりの咳ばらひなどするとは、まさに頬の皮の厚きこと、はた幾枚ありと申さうか。されども、千里の足も頃歩に始る理りにて、鄰へ参るも思ひ立ねば行かれぬなり。思ひ立たを門出の日と勇み進みて、諸共に彼の人間第一の……〔一葉脱落〕……トンという嶋に移り住めりし。ピタコラスといふ賢人、始めて此ヒロソヒといふ語を用ひしより創まりて、語の意は賢きことをすき好むといふことなりと聞えたり。此人と同時にソコラテスといへる賢人ありてまた此語を継ぎ用ひけるが此頃此学をなせる賢者たちは自らソヒストと名のりけり。語の意は賢哲といふことにて、いと誇りたる称なりしかば、彼のソコラテスは謙遜してヒロソフルと名のりけるとぞ。語の意は賢哲を愛する人といふことにて、所謂希賢の意と均しかるべしとおもはる。此ヒロソフルこそ希哲学の開基とも謂べき大人にて、彼邦にては吾孔夫子と並べ称する程なり。さるに其頃の習として、彼邪説を信じ、誕妄なる神仏を尊む世なりしに、此大人は敢て是を信ぜざりしかば遂に神を無する咎として死刑に処せられたり。是正しく吾人皇五代孝明天皇七十六年にて、無惨や此大人刑に臨み悔恨怨悲の色もなく、彼名高き希臘の垂天にて、死に就きけり。されど其道は愈盛になり、中にも其高足弟子にプラトといへる人あり。またプラトの徒弟なるアリストットルといふは、彼有名なる馬設墩の主歴山大王を教育せし人なり。かゝる程に、かの希臘の世には此学に力を尽せる人も多くして、此等の外にも有名の賢人いと多しと聞くに、彼の羅馬は是に続きて人文備はりし国なりけれど、此世には夫の耶蘇の道盛なりし程に、希哲学も耶蘇教も混雜して、希哲学の本意は何時となく埋れる岩となり、はた塞がれる路とぞ、なりける。抑同じく人間の道を教ゆる法なるに、かく様のかはれるは如何なる訳^{ワケ}なる哉といふに、爰に一つの理あり。夫の耶蘇の教といふも様々に説法^{トキ}こそかはれ、詮ずる処ハローフまたチェリツチといひて、仁愛慈恵を宗とし、神を尊び人を憐む道にしあれば、希哲学とても

異なることなきはさることなれど其差といふは……」(西家威)

これが日本に於ける最初の哲学講義案である。一読して炳なるように、著書調所に於いて講義を企てたものであったと解釈することが出来る。しかしながら講義をやるのか講義の案を拵えるのかということは、これ以上実行されなかったであろうと推察せられる。即ち西周助その人がヨーロッパに留学するよう命令を受けて、文久二年(六^二八) (壬戌) 六月十八日海路をとり、浦賀、下田、長崎を経て万里の鵬程に上ったので哲学講義は果し得なかったものであらうと解釈せられる。それからこの講義の出来た年月を文久二年六月以前、即ち彼が留学の途に上る以前のものとして決定する理由は次の如き拠り所があるからである。

一、この講義案の行間には一つの新体詩と漢詩の字句が落書のように書き込まれている。先ず新体詩の方から挙げて見れば次の如くである。

はるたびや	はるゝひまきて
たびはじめ	年はなつくる
ふみひさし	つきはとなふる
みづよなし	あをうなばらの
あらなみを	あめふりしづむ
あさしほに	ゆげむすふねに
ゆげをたて	ほあぐるはしら
ほをあげて	いでしひとこそ

第1章 文久2年（1862年）の哲学講義

いかならん
いかにする

いづこにゆきて

「年は名づくるふみひさし、月はとなふるみづよなし」によってこの新体詩の創作年月が文久（二年）（※_六）六月であったことが判明し、これを落書した以前に哲学講義の草案は起稿せられていたことが明瞭となるのである。ここではこの一篇の新体詩は単に楽書のようにしか誌されていないけれども、これに就ては愕くべき価値が見出される。新体詩という名は明治十五年の「新体詩抄」に始まるが、それ以前にも西周の「心理学」下巻（明治十二年）や福沢諭吉及び勝麟太郎（海舟）にもこの試みがあって、新体詩の前身時代ともいふべき時期が認められる。この新体詩の如きは既に文久二年（※_二）にかかる創作の新体詩のあったという事実を伝えると同時に、これこそは西洋詩学に謂う所の頭韻（Alliteration, Stabreim）及び脚韻（Fussreim）を意識的に模倣して創作したものであるという駭くべき事実を示している。

二、この哲学講義案内には初めの方の行間に「忿怒相闘」、「巉岸疑虎浪疑獅」、「雷吼電掣」という如き漢詩の平仄を合せるために苦心していたことを想わしめるような語句が落書されている。しかしこれ等の字句は留学の途中下田に滞在していた時拵えた詩の中の詩句及び詩想であって、文久二年（※_六）七月二十日の日記中に記されている詩の中に殆んどことごとく含まれている。

石室山在長津呂磯 不知起祠字於何時

百尺峭壁控蒼海 遠灘渺々入望披

頑礁崛起疑乳虎 怒濤激搏訝狂獅

雪碎玉散妖霧迸 雷吼電掣陰風吹

古龕屋暗莓苔封 危棧年久蔦蘿支

吾来賽神々不言

空使秋風動吟鬚

詩の平仄を合せる為の落書は勿論詩の出来上る以前のものであるから、如何に晩く見てもこの草案は文久二年（（*二）六二八）七月二十日以後に書かれたものではあり得ない。

これ等の理由によって、西周助はその留学の直前、著書調所（五月洋書調所と改称）に於いて講義しようという目的の下に、哲学講義案を作製したものであることが断定せられる。この草案は洋行の途上、江戸より長崎迄の日記の誌されている手帖の前半に書かれているのであって、起草年代等にも別に疑を容れる余地はないようである。しかもこの日本最初の哲学講義案も作者その人からは別に重要にも考えられなかったと見えて、或は落書され、或は破損されて僅に原形を残したのである。

講義案は一見して、明瞭なように、哲学史的体裁をとっている。先ず哲学の語義から始め西洋のヒロソヒ（Philosophy）を希哲学と訳し、東洋のいわゆる希賢の意に等しい言っている。故にこれを希賢学と訳しても構わない筈であるが、希賢と言わずして希哲と言った所に訳字選択の苦心が存するのである。次に彼の述べようとした内容は一葉（二頁）の脱落と未完成の為に明瞭でないけれども、大体ギリシャのピタゴラス、ソクラテスからプラトン、アリストテレスを略述し、哲学とキリスト教との区別を論ずる所に至って絶えている。こういう遣り方で近世にまで及ぼうとして遂に果さなかったものであらう。故に西周助はキリスト教を如何に考え、哲学と如何に相違すると思惟したかは、この講義案の範囲では知ることが出来ない。しかしながら留学の命を受けて正に船に上ろうとする十数日前に、友人松岡隣に知らせた書翰の中に於いて、西洋哲学に就いて、その卓越せることを記し、キリスト教は取るに足りないということを報告し、「西洋哲学の最初の移入者」及び「哲学は人間第一の学である」ということの自覚者」としての歎びを洩している。これによって西周助のキリスト教に対する考えが

第1章 文久2年（1862年）の哲学講義

判明し、併せて哲学講義案起草がこの頃であったと言うことの傍証を得られるのである。

「小生頃来、西洋之性理之学又経済学抔之一端を窺候処、実に可驚公平正大之論に而、従来所学之漢説とは頗る端を異にし候処も有之哉に相覚申候。尤彼之耶蘇教抔は今西洋一般之所奉に有之候得共、毛之生たる仏法に而、卑陋之極取べきこと無之と相覚申候。只ヒロソヒー之学に而、性命之理を説くは程朱にも軼き、公順良然之道に本き経済之大本を建たるは所謂王政にも勝り、合衆国英吉利等之制度文物は彼堯舜官天下之意と周召制典型之心にも超えたりと相覚申候」（文久二年（一八六二）五月十五日附、六月二日追記、松岡氏藏）

耶蘇教は毛の生たる仏法の如くであつて、齒牙に掛くるに足らないが、「ヒロソヒー之学」は程朱の性理学以上のものであると考えたのであつた。

かくの如くにして文久二年（一八六二）に西周助によって哲学研究の端緒が拓かれたのである。文久二年と言えば、外国人を撃攘するという風潮が盛さかんになって、その年の八月には相州生麦村に於いて嶋津久光の従者が行列の先方を横ぎつたという理由によって外人を殺傷するなどの大事件が勃発し、天下の耳目を聳動させた年なのである。いわゆる攘夷鎖国の論が高潮に達し、実行に移ろうとする年であつた。かかる騒然たる中に於いてもなお毅然として新しき学問の領域を開拓し、自ら深く思索し、哲学興隆の基を關ひかいて、日本文化の発展に真に寄与したこの学者的態度は後世までも深く感謝せらるべきところであろう。

しかし哲学研究は集団的に起つたものであつて、或る一個人の功績とのみ考えては或は正当でないかも知れないという疑うたがひが起つてくる。西周助が哲学研究の先駆者の一人であつたことには疑われないが、彼の外に協力者とか

共学者とかがあって、哲学研究の一つの雰囲気があったもののように考えられるのである。この雰囲気の中にあつた人は哲学研究の源頭をなした人物として西周助と同様に注目せらるべきであることは言うまでもない。どのように狭く考えても、津田真一郎のみは哲学研究の発生に関与した人と見なくてはなるまい。西周助と津田真一郎とは何れも独身の頃、著書調所の長屋に同居して学事を研究した間柄であつたが、結婚後も与ともに下谷に住んで日夕往復し、日常のことのみでなくあらゆる問題の相談相手であつた。こういう仲間の間に哲学研究の気運が醸成されたもののように考えられる。このように想像せしむるに足る資料としては津田真一郎の次の如き記述がある。

「蓋学問を大別するに二種あり。夫高遠の空理を論ずる虚無寂滅、若くは五行性理、或は良知良能の説の如きは虚学なり。之を实象に徴して専ら确实の理を説く、近今西洋の天文、格物、化学、医学、経済、希哲学の如きは実学なり。此実学国内一般に流行して、各人道理に明達するを真の文明界と称すべし。」（明治七年、「明六雑誌」第二号「開化を進る方法を論ず」）

この論文の希哲学という言葉に注意しなくてはならない。「希哲学」は西周助の草案中ではヒロソヒの訳語であつた。しかもこれは西周助の鑄造したる極めて特殊の用語であつて、他にかかる使用例は認め得ない。その特殊な用語が十余年後に津田真一郎の論文中に於いて活字となつて顕われたのである。この事實は如何に解釈すべきであらうかと言うに、勿論この訳語を津田真一郎もまた知っていたが、むしろ協力してかかる言葉を案出したものと考えねばならぬ。西周助は希哲学という言葉を直ちに単に哲学と改めて既に慶応末明治の初め頃より使用しているのに対し、津田真一郎はその後迄も、彼等が最初に親しんだ希哲学という語に愛着していたものであ

第1章 文久2年（1862年）の哲学講義

う。これは一つの単なる訳語に關聯して言えることであるが、哲学研究の初期に於ける西周助と津田真一郎との活動は、総てこれを別個に考え得ない程親密な關係にあった。

幕末に於いては辞書及び文典の編纂が行われ「ヒロソヒー」という字句に接したのも尠く^{すくなく}なかったのであろう。しかしそれに与えられた訳字は「性理学」という如き支那哲学上の成語をそのまま襲用している。慶応二年（*_{六八}）に刊行された「英仏単語篇」等にさえも「ヒロソハー」に対して性理家^{せいりか}という訳字を当てている如き状態である。又、後年（明治初年）哲学と同義に使用せられた「理学」は幕末時代に於いても宋儒の理氣の説から転用されて哲学の意にも用いられ、一方では自然科学の意にも須^{もと}いられて初くも訳語の混淆を来^{きた}している。慶応二年（*_{六八}）の知新館版「理学初歩」は格物の本である。同じ頃用いられた「窮理学」も単なる「理学」と与^{とも}に両様に濫^{らん}用せられていたように見える。これ等の言葉は例い如何に用いられていようとすべて漢語をそのまま利用したものであって、何等思索のあととは認められない。これに較べると、西周助、津田真一郎等の鑄造した「希哲学」は深き考窮の産物であつたと考えられる。彼等兩人は何れも漢字に就いても深い教養があつて、特に西周助の如きは周濂溪の「大極図説」の説を歛^くび、ここに述べられている「士は賢を希^{もと}う」の思想に深く影響せられたのであるから、希哲学という訳字の源流を尋ねれば、漢学の支配力の一産物であるかに考えられるけれども、この支配力から脱出して、新しき訳字を創り出そうとした思索と努力とは充分高く評価せられねばならぬ。

西周助と津田真一郎とはこれから後の哲学の發展に就いても、協力して大きな足跡を残しているのであつて、その交友關係は私交上にも、又学問的にも極めて濃く結ばれ、相互に裨益する所の多かつたことは兩人の為に惟^{ただ}わざる幸いであつたと言わねばならぬ。

西周助は文政十二年（*_{二八}）二月三日、石見国津和野に生れた。父は藩主亀井家の医師であつた。嘉永二年（*_{九八}）大阪に出でて後藤松陰（機）に漢学を学び、嘉永六年（*_{二八}）江戸に出府、オランダ語を始め、後手塚

律蔵の塾に入って更に修学し、師の推輓によって英語を独習し、安政四年（*_七^八）五月四日蕃書調所の教授手伝となり英学を教授していたのである。

津田真一郎は幼名を喜代治と言う。後行彦と改め真一郎と称した。文政十二年（*_九^八）六月二十五日美作国津山東町の道家氏に生れ、入って当時断絶していた津田家を再興した。幼少の頃から藩儒大村成天に従って漢学を修め、榊原景周に就いて、越後流兵学を学び免許皆伝となった。嘉永三年（*_九^八）江戸に出でて箕作阮甫及び伊東玄朴の塾に入って蘭学を修め、又佐久間象山の門に西洋流兵学を学んだ。ここで彼は吉田松陰と親交を結んでいる。安政三年（*_九^八）長崎に遊学して英学を修め、翌年再び江戸に還り、その年の五月四日、蕃書調所の教授手伝並となって初めて西周助と相識り、相与に英語を講義していたものである。

なおこの哲学研究の仲間の中に加藤弘蔵（弘之）をも数えることが出来る。加藤弘蔵は明治初年に法理学、国家哲学の立場から熾烈なる活動をなし、世に洽く知られることは西周助、津田真一郎以上に出たのであるが、年齢はこの兩人より十年稚く、又蕃書調所に関係した年代も二三年晩れて万延元年（*_九^八）以後であった。従って年齢に於いても、地位に於いても初めの間はこの兩人に兄事して、彼等の誘導を受けたことも鮮くない。しかし哲学研究の仲間としては先輩後輩の關係でなく、むしろ極めて親しい友人に外ならなかったのである。

加藤弘蔵は天保七年（*_六^八）六月二十三日但馬国出石城下谷山町に仙石藩士加藤正照の長男として生れた。幼名を士代士（とよし）という。嘉永五年（*_九^八）（十七歳）父と偕に江戸に出でて甲州流の兵学を修め、又佐久間象山の門を敲いて西洋流の兵学を学んだ。ここに於いて津田真一郎と相識つたのである。安政元年（*_九^八）、大木仲益（坪井為春又芳洲とも言う）に就いて蘭学を始めた。かくて万延元年（*_九^八）三月十日（二十五歳）に坪井及び川本幸民の推薦に依って蕃書調所の教授手伝並となっている内に、プロシヤの修交使節オイレンブルク伯（Graf von Eulenburg）が来朝し、通商修交紀念として幕府に電信機を献上したので、市川斎宮（兼恭）と与にこれが伝習

第1章 文久2年（1862年）の哲学講義

を命ぜられ、プロシヤ人の旅宿（麻布区光琳寺）に出入する内に、予てプロシヤは学業の熾^{さか}な国であるというこ
とを耳にしていたが、その偽りにあらざることを知って、先ず蘭^{オランダ}独辞書等によって独習し、遂にドイツ語に通
ずるに至り、後には蕃書調所に於いてもこれを講義し、我国ドイツ学興隆^{もとい}の基を拓いたのである。

しかしながらドイツ学流入の功績は加藤弘蔵一人に帰せらるべきでなく、その上位にいた学者市川斎宮の存在
を忘れてはならない。例えば慶応元年（^{1865年}）の開成所職員録中には、教授職市川斎宮、教授並が加藤弘蔵、ド
イツ学世話心得小田条次郎、瓜生禰松と見えていて市川斎宮が却って我が国の大学に於いて最初のドイツ学教授
であり、加藤弘蔵は助教授に過ぎなかった。市川は蕃書和解方以来翻訳教授の業に従事していた洋学の大先輩で
あるが、学問的にはさまで活動の跡もなく纔^{わづ}かに教部の兵書を残している程度に過ぎない為に、世人の注意を惹
くことは少いけれどもドイツ学輸入の最初の功労者という場合、決して加藤以下に位置する者ではない。加藤と
の個人的関係も極めて深く妻の義父ということであるから当然加藤にも義父に当る。

SAMPLE
Shoshi-Shinji.com

第二章 オランダ哲学の東漸

外国との交渉が拓けて我が国人の外国に渡航する者は次第に多く、この間に西洋先進の文明に接した者も少なく、我が学術の興隆を^た佑くるものがあつたが、もともと外国の近代的学術は少くとも二、三百年間にわたつて研鑽集積されたものであつて、これを習得するには外人との偶然的な接触とか、旅行の途次偶々触目したとかいう程度を以ては到底理解し、習得さるべき性質のものでなかった。これを真に理解するには、我が国人中の俊髦をして数年間の日子を費さしめ、しかるべき大家の指導を俟^まつて初めて可能であると言わなければならない。徳川政府の当路者もまたここに氣附く者があつて、歐洲の地に最初の留學生を贈る事となつたのである。しかしこの最初の留學生の撰に入つた者は精神科学の方面に於いては西周助と津田真一郎の兩人であつた。

これより先き、幕論大いに海軍を拡張する氣運となり、文久元年（^{六二}一八六二）大型軍艦三艘の購入方をアメリカ合衆国に依頼し、この建造購入の際に留學生をも派遣し、造船操縦の技術を習熟させようとする目的の下に、文久元年十一月十日、内田恒次郎、榎本金次郎、沢太郎左衛門、赤松大三郎（前名高橋三郎）田口俊平の諸子を選抜した。これと行を同じうして法学、経済学等の学術を研究せしむる事となり、その撰に入つた者は、^か予てかかる希望を政府の当事者に願ひ出ていた津田真一郎と西周助とであつた。

しかるに偶々アメリカには南北戦争が勃発したので軍艦の注文は沙汰止みとなつて、その代りにオランダに一

第2章 オランダ哲学の東漸

艘だけ註文することに変更され、さきに選抜された一行は文久二年（※¹⁸⁶²年）三月十三日にその命令を受領した。かくして一行は文久二年六月十八日品川沖より咸臨丸に乗り組み諸所に碇泊しつつ八月長崎に着した。この養生館には伊東玄伯、林研海の両名が西洋医学を研究していたのであったが、この二人もオランダに留学することに決定して、一行はオランダ汽船カリプス（*Kallipus*）に乗り組み文久二年九月十一日午後一時長崎を出帆した。カリプスは二百トン程の小商船であって、船長はポールマン（*Poolman*）と呼ぶ人、又一行中の主宰は内田恒次郎（正章）であって、御用金として「メキシコ・ドル」二万六千ドルを持参していた。

かくして一行は、文久二年（※¹⁸⁶²年）十月バタヴィアに着し、ここからカリプスに倍する商船テルナテ（*Ternate*）に乗り換えて喜望峰を廻り、セント・ヘレナに立寄ってナポレオン一世の故居を訪問などして、文久三年四月十八日オランダ国ロッテルダムに安着し、直ちに汽車にてその夜の八時半にレーデンに至り、ホテル・デ・ゾンに投宿した。支那語及び日本語の教授（ライデン大学）、ホフマン（*J. J. Hoffmann*）は政府の命を奉じて来り（きた）幹旋すこぶる努めた。ホフマンは独学にて日本語を学んだ者であるが、書くことも語ることも日本人と毫も変らない程熟達していたので、語学の不足に閉口していた一行にとっては非常な便宜であったと言う。四月二十七日海軍留学生の一行内田、榎本、沢、赤松、田口及び医学修業の伊東、林の七名はハーグ（*S. Gravenhage*）に転居し、それぞれ下宿を別にして適當の師匠を撰んで各々得意の専門学を研究することとなったが、ここではかつて長崎にて医学を教授したポンペ（*Pompe van Meerdersfoot*）が政府の命にて一行の為便宜を図ることが多かった。

津田、西両学士は先ず語学を勉強する必要があったので、ホテル・デ・ゾン（*Hotel de Zon*）と同じ街ブレードストラート（*Breedstraat*）のオーデンドルプ（*Oudendorp*）なる者の家に下宿して、ファン・デアーク（*J. A. Van Dijk*）と呼ぶ知名の語学者に約三箇月間オランダ語を学び、やや上達を見たので、レーデン大学教授シモン・フィセリング（*Simon Vissering*）に従って、いよいよ年来希望の諸学科を学ぶことになった。ファン・デアークとい